

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 8 NO. 3

(通巻 32号)

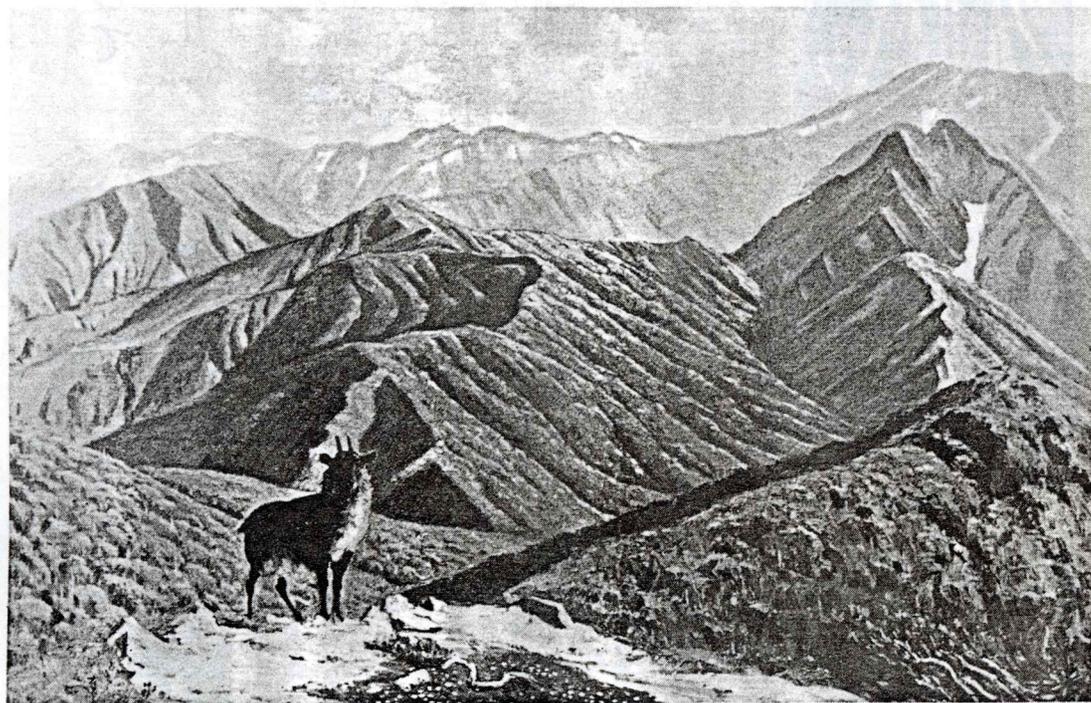
昭和56年9月21日発行

編集・発行人 高橋 在久

〒 260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎ 0472-42-8311 (代表)



鶴田吾郎「朝日連峰」

観潮台

県民アトリエの完成によって昨年四月から本格的に「語る」「つくる」の事業がスタートした。とりあえず洋画、彫塑、書芸、七宝焼等の八講座を開設したが希望者が多く、公平を期するため抽せん受講者をきめている状況である。

この盛況は何に起因しているのでしょうか。ゆとりと余暇ができたことも一因ではあるが、むしろ歴史的に形成された日本人の美的関心がそうさせているように思える。もともと日本人にとって美術とは、生活の中に存在し、ときとしては自ら造ることによって美的体験を味わうという性質がある。

白鳳天平の絵画、彫刻、建築等から江戸時代の浮世絵等にいたるまで沢山の美術工芸品を創り出し、市井人も手近なところで書画骨董を愛好するという独特の美の伝統が引きつがれてきた。マジックやボールペンで字を書くことへの用は十分足りるが、用を超えた中に美を求め、自己表現を見出そうとする。小学生の中にさえ書道チームが静かに広がってきていることと関連がありそうだ。(安増 順)

《特別展》

肉筆浮世絵展に際して

—十月十四日(水)まで—

本年度の本館の特別展は、九月十二日(土)から十月十四日(木)までの「肉筆浮世絵展」と十二月五日(土)から翌年一月十七日(日)までの「浅井忠と京都洋画壇の人々」である。

現在開催中の「肉筆浮世絵展」については、すでに本誌前号において「《特別展》肉筆浮世絵展」として立正大学教授・日本浮世絵協会常任理事、山口桂三郎氏の御寄稿を掲載しているのですが、ご理解いただけたと思うが、前号がお手許に届かなかった方々のために、大要を略記する



歌川豊国「桜下花魁と禿」

享三年間三月には利根川西を武蔵とし、東を下総としている。現在のように、江戸川が境となった。しかし庶民の感覚はどんなものであったのであろう。安永六年(一七七二)刊の柳

と、○浮世絵といえは、版画が考えがちであるが、肉筆画が本流である。○信長・秀吉時代から始まり、これを近世初期風俗画と呼んでいるが、この肉筆画の系統をふまえたのが浮世絵である。○肉筆は単一作品であるため貴重なものである。○今回の展覧会で、「真崎の図」「西行図」などは初公開である。

また海外から帰った作品も含まれている。○寛永・寛文から幕末に至る各流派の作品が大体理解できる内容の豊富さをもっている。○本県は浮世絵師との関係も大である。○浮世絵師の絵馬も観賞できる、等である。

浮世絵は、いうまでもなく本来は親しみ深い江戸庶民芸術であり、その絵は当然のことながら江戸の時代と生活が反映されている。浮世絵は一つの芸術作品であると同時にその時代を表わす作品としても興味深いものがある。

さて、菱川師宣は元禄七年(一六九四)に没している。この年柳沢吉保は老中格となり、綱吉が生類憐れみの令を出した。世にいう「犬公方」である。これより八年前、即ち貞



懐月堂度繁「立美人」

多留十二篇には、下総はおかべ、武蔵はあんもなりとある。

家康開府以来江戸は膨張を続け、盛場の賑いは地方にはない江戸独得のものであった。さらに、社会増による人々は



無款「美人持つきせる」

といわれた江戸の人口は、ロンドン、パリも五、六十万の人口であるので、まさに世界一の都市が本県の隣に出現したのである。この大江戸が生んだ諸産は、今日われわれの衣食住にも生き続けているものが多い。

庶民の歩んだ中で、もてはやされ受け継がれてきた今回の展示作品、それを育んだ、江戸という土壌の上に咲いた絵画をこゆつくり御鑑賞いただければ幸甚である。

なお、九月二十日(日)には講演会「肉筆浮世絵の魅力」が

長期にわたる江戸生活の中で在住者との間で醸し出した江戸文化を形成してゆくことになった。

享保の頃には百万を越える

山口桂三郎氏を講師にお迎えして開催された。なお、さらに十月三日(土)午後二時より美術を語る会「肉筆浮世絵展の見方」が催される。



第2回 美術館夏季大学

はじめに
千葉県立美術館では、昭和五十二年度より、「みる・かたる・つくる」美の広場活動の一環としての美術館夏季大学を開講してきた。
開館当初、来館者の多くの方々から、「絵というのとはどのように見るのか」とか、「この絵はどのように制作したのか」といった声が館側に寄せられたことがあった。このことと同様に、展覧会だけではなく、美術に関する知識を習得したり、また、教養としての美術に親しむ機会が欲しいとの要望も寄せられた。

美術館夏季大学の 五年間を顧みて

そこで、美術に関する知識や理解を深めるとともに、その魅力に触れながら、日本美術の歴史的な推移や多様化した現代美術の動向に新鮮な気持ちで接することができるようにと、開講したのがこの美術館夏季大学である。
今までをふりかえると
昭和五十二年度から五十四年度の三ヶ年間は、本館の施設が未だ完成しておらず、第六展示室を利用して行った。展示室用に設計、施工してあるため、講師の声も良く聞きとれず、しかも、外部との遮断も不完全であり、受講者の方々にたいへんご迷惑をかけたものである。また、スペースも狭く、ずいぶん窮屈な思いをさせてしまった。
昭和五十五年度の第四回を迎える頃には、待望の県民アトリエも完成して、各種講座が順調に実施されていた。
会場となる講堂は、採光・音響効果・視聴覚器具の設備などが十分に配慮され、その



第4回 美術館夏季大学

利用が期待されていた。椅子も二百脚余りを擁し、多数の参加者に対応できることがたいへん心強かった。
それと同時に、県民アトリエでねらうものは、美術に対する体験であり理解である。例えば、美術作品の鑑賞は

| 年度 | 講師 | 内容 |
|----|------------------------|--------------------------------|
| 52 | 村木 明(武蔵野美術大学教授) | 近代絵画の歴史と見かた |
| | 佐々木直比古(山種美術館学芸部長) | 近代日本画の歴史と見かた |
| | 弦田平八郎(美術関係学芸員) | 日本近代彫刻の歴史と見かた |
| | 島原 住雄(筑波大学教授) | 現代美術の動向と見かた |
| 53 | 高橋 在久(千葉県立美術館館長) | 日本近代洋画のルーツ |
| | 金子 量重(大妻女子大学講師) | 近代工芸の歴史と見かた |
| | 堀江 知彦(二松学舎大学教授) | 書芸の歴史と見かた |
| | 大木 衛(千葉県立美術館学芸課長) | 美術品の取扱いと保存の仕方 |
| 54 | 朝日 晃(東京都美術館事業課長) | 作家の中のヨロコビと美術への自覚 後者物三を中心として |
| | 榎村廣千代(美術評論家) | 前衛美術の先駆者たち |
| | 高橋 在久(千葉県立美術館館長) | 日本洋画史の中の房総 |
| | 田中 環(読売新聞社編集委員) | 日本洋画の夜明け |
| 55 | 高橋 在久(千葉県立美術館館長) | 浅井忠と明治美術会の人々 |
| | 陰里 鏡郎(東京都立文化財研究所主任研究官) | 黒田清輝と白馬会の人々(その1) |
| | 田中 環(読売新聞社編集委員) | 初期文展の人々～日展源流考～ |
| | 朝日 晃(東京都美術館事業課長) | 大正期の美術と白樺 |
| 56 | 高橋 在久(千葉県立美術館館長) | 浅井忠と京都洋画壇 |
| | 細野 正徳(東京都立博物館主任研究官) | 京都派の特徴 |
| | 陰里 鏡郎(東京都立文化財研究所主任研究官) | 黒田清輝と白馬会の人々 |
| | 田中 環(美術評論家) | 昭和日本画の揺籃期 |

作品との対話であり、その作品を描いた作家の人となりやその時代的背景、モチーフの意味などが知りたくなくも満足できるようなと考えられた施設が県民アトリエであり、理解のための活動の一つがこの美術館夏季大学である。
ちなみに、本年度を含めた過去五回の実施内容は別表のとおりである。
今後の課題
毎回最終日に受講者からアンケートをいただいたりしており、それらを総合してみると次のようなことになる。
(一)実技講習 (二)作家個々の研究 (三)作家の物の見方、心

の動き、一つの作品が完成するまでの体験談や絵のめざすもの(作家個人のテーマ・思想) (四)広く文化財に関するものなどが、学習内容に対する要望としてあげられる。
また、二回以降受講者の約三十%～五十%の方々が過去に参加されたことがあり、八十%以上の方々が、今回の受講を希望されている。これらを考えるに本講座も漸く定着しつつあるので、今後は講義内容の継続性やシリーズ化をはかることも必要になってくるだろう。
さらに、期間や曜日など日程についても、今後大いに検討を加えていく必要にせまられている。ところで、講師の先生方からは、年代の幅がかなりあり講義内容をどの年代にあわせ、かつ段階をどこに置いたらといった、内容の精選に苦勞するといった貴重な御意見も承わった。何れにしても、今後ともより充実した美術館夏季大学となるよう心がけたい。

展覧会案内

千葉県 移動美術館

本館では、より広範な地域の方々に美術作品鑑賞の機会を提供するため、収蔵作品を県内各地に巡回する千葉県移動美術館を企画している。五十二年度から毎年行ない、初年度は木更津市、館山市、五十三年度は松戸市、大多喜町、五十四年度は成田市、銚子市、五十五年度は東金市、佐原市を巡回した。今回は、その第五回目として流山市と八日市場市を開催地に選び、まず流山市郷土資料館で十月七日(水)から二十日(火)まで開催し、次いで八日市場市立公民館で十月二十四日(土)から十一月一日



後藤純男「山門雨後」

(日)まで開催する。いずれも入場料は無料である。ぜひこの機会に、出来るだけ多くの方々に御鑑賞いただき、美術をより身近なものとしてとらえていただければ幸いである。出品予定作品は次のとおり各部門にわたる三十八作家五十三点である。

日本画

富取風堂「群魚」渡辺学「川口」松尾敏男「原野」後藤純男「山門雨後」

洋画

都鳥英喜「婦人像」石井柏亭「信州風景」霜鳥之彦「緑のスウェーター」黒田重太郎「女と小犬」原勝郎「モンマルトル」鶴田吾郎「お山の鈴音」石橋武治「白鷺のいる風景」椿貞雄「横堀角次郎兄像」中西利雄「外房風景」板倉鼎「金魚と雲」小堀進「花と海」無縁寺心澄「医大尖煙突」笹岡一「秋麗芦の湖」桜田精一「冬の並木道」篠崎輝夫「絵馬による」雲嘯「INSECTS」原三郎「魔船」時田幸彦「ピサの斜塔」
版画
浜口陽三「テーブル掛けとサ



都鳥英喜「婦人像」

克蘭ボ」
「二匹の蝶」瑛九
「林の目」
「よろこびB」星讓一
「王の樹」
「陽(林)」
深沢幸雄「古い楽譜」
「虚空の影」
池田満寿夫「遙かなる通り」
「夜の旅」
池田良二
TOGETHER
AGAI
N
「NOBODY
KNOWS
MY MIND」

彫刻

大川逞一「聖観音」大須賀力「倚る」
郡司和男「天使」
工芸

香取秀真「鳳凰文様花瓶」
「菊文釜」
「笑獅子香炉」
「鳩香炉」
津田信夫「一点玲瓏」
「鴨」
「鳳翔薰炉」
「北辺夜描子」
信田洋「黒孔雀の瓶」
「銀壺(花ひらく)」
「乳装銀瓶」
金冠銅瓶」
書

大石隆子「待君」
小暮青風「天魁」
鈴木方鶴「万昌」
金子聴松「視思明」

新収蔵作品紹介(Ⅲ)

購入

鶴田吾郎作

「千川堤の桜」(油彩、一九一二)
「アムールのプラゴエンチェスク」(油彩、一九一九)
「初秋」(油彩、一九二二)
「婦人像」(油彩、一九三五)
「蒙古の女」(油彩、一九三七)

鶴田吾郎は、荻原碌山・中村昇らと中村屋のアトリエに集ったグループの一人である。当時、昇と共に描いた「エロシエンコ像」で、鶴田の名前を知る人も多いであろう。

鶴田は、「旅の画家」である。一生の大半を旅に費いやし、その範囲は、国内はもとより、中国大陸・ソ連・ヨーロッパ



鶴田吾郎「蒙古の女」

と広い。旅で生れた作品は、「的確な写実力」と昇が予測した「驚くべき自由と大胆、適勁の筆致」で描かれている。「蒙古の女」(一九三七)は、女を中心にまわり、牛を自由かつ大胆に配置し、確かな写実力をもって牛の半身のみを描き、それにより大地の広がり表現し、広大な土地に生きる人を動物を土の臭いとともに見事に描き出している。「朝日連峰」(一九五二)「五四」では、山岳に孤独にたえずカモシカを描いたものであるが、「蒙古の女」とは一変して澄みきった空気の中にカモシカの一瞬の静をとらえ、大自然に力強く生きる小さな生命が鼓動している。鶴田にとって、絵画は常に自然と生命の表現の場であった。一生の大半を旅に費した鶴田にとって自然の中に生きたことは孤独であったに違いない。

美の泉



銃後工場の護り

五十五年二月、本館の東京湾側の屋外に、藤野天光のブロンズの大作「銃後工場の護り」が据えつけられた。

この作品は戦時下の鋳物工場の労働者を実際にモデルとし、三十六才の天光が精魂を傾けて制作しただけあって、昭和十三年の文展では特選となり、翌年のアメリカ万博にも出品され好評を拍した。

また、文展の〆切直前にこの石膏原型がこわれたため一時出品を断念したが、彼の意気込みに感激した労働者が勤務終了後の夜間にモデルに立つことよって完成したというエピソードも残されている。藤野は明治三十六年、群馬

県館林市に生まれた。東京美術学校彫刻科では北村西望に師事して研さんを積み、次第に彼独自の境地を拓きながら力強く若さに溢れた人間の美しさを激しい気性をテコにして生涯追求し続け、多くの優品を残した。

本館の玄関口にある「ああ青春」と題する等身大の青年像は昭和三十七年の日展で文部大臣賞を得た作品である。

このほか代表作としては「光は大空より」(同四十年日展芸術院賞)、若潮団体のミニチュアメントなどがある。

藤野は昭和六年から市川市に居住し、日展理事、日本彫塑会常務理事として活躍すると同時に千葉県美術会長兼理事長として本県美術会の振興に大きな功績を残した。

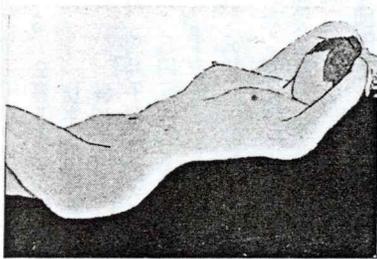
昭和四十三年には声帯摘出の大手術をしながらも日展に大作を発表する気力を示したが惜しくも昭和四十九年、七十二才を一期として世を去った。(安増 順)

トピックス

前号にてご案内した企画展「房総の美術家シリーズ(II)浅井真展」は七月二十三日より八月二十日まで開催されましたが、花、林、岩、裸婦、風景などをモチーフとして、飽くことなく描き続けた画家の真摯な創作態度がうかがわれ大きな反響を呼びました。

会期中開かれた「美術を語る会」では、兼巻通高・洋子御夫妻、中村陽三氏を迎え、作者浅井真について興味深い語り合いが行われました。

さらに会期終了後、兼巻通高・洋子御夫妻並びに佐藤三千世様より作品四十点が本館に寄贈されました。ご厚意にあつく感謝いたします。



浅井 真「裸婦D」

談話コーナー

― 県立美術館を訪れて―
絵を見て思ったのは

小6 南崎由樹(千葉市)

先日、美術館へ行きました。けれどもはじめは、まだ一度も県立美術館へ行ったことがないので、気に入る絵なんて一枚もないし、どうせつまらないと思っていました。

美術館に入るとシーンと静まっていました。館の人の話を聞き自由鑑賞になりました。一つ一つ見て行くうちに、絵っていいものなんだなと思ったりもしました。写真などで見る洋画がいいなと思っていました

が、日本画でも一つだけ、すてきながありました。そして、私にもいいなと思う絵が一枚もあったのがうれしく思えました。一回サツと見て終わったころ、今度は鑑賞指導に移

りました。先生や友達と一緒に、自分の意見を出し合っていて、うなずいたり、もう一度近くで見直したりしました。私に気が付かない事でも、友達が言ってくれるのでよくわかりました。構図をしおりにかくと、こんなかき方もあるのかと考え、図工で今度絵をかく時には参考にしようと思いました。

最後に、自分はどの絵が一番気に入ったかという事で、その絵の前に行きました。私は、松が手前で静かな感じを出し、遠くにある光が雨に光ってきれいなものを選びました。

美術館に行つて、いろいろ勉強になったと思います。また、みんなで行つて、意見を出し合うことも大切だと思います。

行く前までは、つまらない所だと思っていた美術館が、こんなに役に立つ所だとは思いませんでした。できたら、また行つてみたいと思います。

- 日本画入門講座
かねてより皆様から御要望の多かった「日本画」の入門講座を開くことになりました。材料費等多少かさむと思いますが、どうぞご参加ください。
- 期日 10月10・11・13・14・15・16日
- 講師 渡辺 学氏
- 申込締切 9月30日(木)
- ◎ デッサン入門講座(三期)
- 期日 10月13・14日
- 講師 積田 鯉士氏
- 申込締切 9月30日(木)
- ◎ 洋画研修講座(二期)
- 期日 10月24・25日
- 11月21・22日
- 12月19・20日
- 講師 高橋規矩治郎氏
- 申込締切 10月9日(金)
- ◎ 彫塑入門講座(二期)
- 期日 10月27・28日
- 11月3・4日
- 11月10・11日
- 講師 青木三四郎氏
- 申込締切 10月12日(月)
- ◎ 七宝焼入門講座(第二期)
- 期日 11月14・15日
- 講師 長南光男氏
- 申込締切 11月7日(土)

お知らせ

一、趣旨 本展は本県の美術家の作品を広く紹介するとともに、県民の美意識を高め、郷土美術文化の振興と情操の純化に資する。

二、会場 千葉県立美術館

三、会期 10月24日(土)より11月15日(日)まで

四、搬入期日 10月17日

五、出品

※「昭和56年度事業案内」での「七宝焼入門講座」の期日が次のように変更になります。二期 11月14・15日 三期 10月27・28日

◎ 第3回「美術を語る会」

一、日時 10月3日(土) 午後2時～3時半

二、主題 「肉筆浮世絵展の見方」

三、講師(話題提供者) 長野 方治氏 (浮世絵研究家)

◎ 第33回千葉県美術展覧会(県展) 開催要項(抄)

- 3、公募 本県在住者及び本県出身者にて満19才以上の方
- 六、出品手数料 三〇〇円(各部一人一点とする)
- 九、入場料 無料
- ※なお県展についてのお問い合わせは千葉県美術会(電話〇四七二(2)二七一〇)へ
- ◎ 団体展(9月～11月)
- 千葉81展 9・22～9・27
- 塑の会展 9・29～10・4
- 第28回千葉県勤労者美術展 9・29～10・4
- ファンシー洋画展 9・29～10・4
- 第31回千葉デザイン展 9・29～10・4
- 千葉市小・中・養護学校児童生徒徒総合展 10・6～10・14
- 第33回県展 10・24～11・15
- 千葉県高等学校総合芸術祭(書道・美術・工芸展) 11・19～11・29
- 芸術祭参加写真展 11・19～11・29

来館者

- 7月 県知事、県教育長、信田洋氏
- 11月 木村賢太郎氏
- 10月 太田洋三氏、鈴木治平氏
- 15日 松戸市教育長
- 17日 茨城県人事委員会
- 22日 文部省六名
- 28日 千葉市助役
- 8月 宮城県出納局管理課 県副知事
- 3日 京都市美術館学芸課長 原田平作氏
- 8日 兼巻通高氏、中村陽三氏(美術を語る会)
- 10日 浮世絵太田記念美術館より二名
- 24日 細野正信氏、植村鷹千代氏、陰里鐵郎氏、河北倫明氏、中村傳三郎氏、郡司幹雄氏、前田泰次氏、堀江知彦氏、松下英磨氏、山本信吉氏
- 9月 渡辺 学氏
- 3日 中華人民共和国駐日大使館より三名、日中友好団体千葉連合会五名
- 8日 佐倉市長、文部省四名

日誌抄

- 7月 洋画研修講座
- 4日 金工芸信田洋回顧展始まる(7月19日まで)
- 7日 陶芸入門講座
- 8日 ボランティア研修会
- 11日 美術を語る会
- 22日 県博協役員会
- 23日 浅井真展始まる(8月20日まで)
- 8月 美術館協議会
- 19日 県博協編集委員会
- 24日 美術館資料審査委員会
- 28日 県立美術館・博物館館長会議
- 9月 特別展肉筆浮世絵展はじまる(10月14日まで)



浅井 忠自作印 (原寸)